

ワシントンで働く女性の会(J-WIP)第17回会議報告



4月5日、ワシントン DC で働く女性の会 (Japanese Women in the Professions in Washington D.C. (J-WIP)) では、乳がんを専門にされている医師の藤原沙織先生をお招きし、「乳がんを正しく理解しよう」をテーマにご講演いただきました。

藤原先生は、熊本大学の乳腺内分泌外科で乳がんの臨床に携われた後、現在は、米国国立衛生研究所 (NIH) で研究されており、臨床と研究の両方におけるご経験を有されます。乳がんは、女性にとって疾患しやすい癌の1位であるものの、生存率は高く、特に早期発見できた場合、生存率は9割を優に超えることから、定期検診の重要性について特に強調されました。

今回のご講演では、乳がんを正しく理解するために、乳がんになりやすい人、自己対策、治療方法についてお話を頂きました。乳がんは、日本人は11人に1人、アメリカでは8人に1人の割合で診断され、珍しい病気ではなく、また、男性が乳がんになることもあるそうです。興味深い点として、統計によると、日本人は疾患率のピークが40歳代と60歳代にある一方、アメリカ人のピークは60歳代にあるという点があります。かかる統計結果からは、日本人は、米国で一般にいわれるよりも前の世代から定期的に健診を受けるべきということがいえます。また、上述のとおり、乳がんは早期発見されれば生存率が極めて高いものの、日本人の検診受診率は他国に比べて極めて低い (OECD のデータによると、米国における受診率は80パーセントを超える一方、日本は36.4パーセント) 状況にあり、検診の重要性、また、職場における理解の必要性などの課題も指摘されました。

さらに、乳がんになりやすさは遺伝や一定のリスク要因との関連性がみられ、近親者に乳がん患者がいる場合やリスク要因項目に多数該当する場合、特に意識して定期健診を受診すべきとのことでした。

このほか、乳がんがどのようにできるのか、具体的な症状、それらを踏まえた上でのセルフチェックのポイント、マンモグラフィーやエコー検査の特徴や機能について丁寧にご説明いただきました。乳がんの治療方法は全てカスタムメイドで、医師と患者が時間をかけて話し合い、それぞれの患者の置かれた状況や希望に応じて決めていくということ、また、乳がんの検査方法や治療法は日々進化しており、日本では診療ガイドラインも3年に一度、最新の科学的根拠に基づいて更新されていること等が印象に残りました。

当日は、J-WIP のメンバーを中心に約20名の方にご出席いただきました。